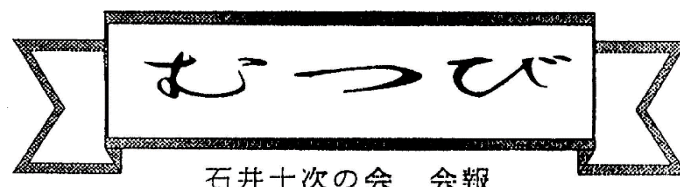


2026 年
(令和 8 年)
3 月 12 日



342 号

石井記念友愛社 80 周年、そして、共に未来へ

元福岡県立大学 田代英美

『石井十次資料館研究紀要』第 26 号(2025 年 8 月)に、大原あかね氏(公益財団法人大原芸術財団代表理事)の「石井十次ひいおじいちゃまへ たくさんの『ありがとう』と、私たちの今、そして叶えたい未来について」が掲載されています。大原あかね氏は石井十次と血のつながりはありませんが、本原稿執筆にあたり真っ先に浮かんだのが「ひいおじいちゃま」という言葉だったそうです。ここには、大原あかね氏の曾祖父・大原孫三郎、石井十次、児島虎次郎の厚い友情と友情を源として展開され現在まで受け継がれている社会事業や芸術文化事業のことが書かれています。孫三郎は石井十次との出会いによって自分の進むべき道を見出しました。「人と人との出会いは、偶然であり、そして必然でもあると思いますが、まさに孫三郎と石井十次の出会いは、偶然であり、そして必然でもあったのだと思います。」(p.1)大原孫三郎は石井十次・児島虎次郎への思いを「功績を伝えるだけでなく、その事績を持続可能な形で未来へつなげ」(p.2)たのでした。芸術文化事業では、2024 年、新たに大原芸術研究所が設立され、「芸術研究を通じて『人間』に向き合い、未来へ貢献する、これも新しい挑戦」(p.6)が始まっています。

2025 年の第 25 回石井十次セミナーでは、森川政典氏(当時、公益財団法人大原芸術財団事務局長)が「新生『大原芸術財団』のめざすもの」という演題で講演されました。大原あかね氏と同じ趣旨で、明快に解説してくださいました。文を読み講演を聞きながら、大原あかね氏や森川政典氏が指摘された人と人との出会いの偶然・必然や大原芸術研究所の挑戦は、同様のこと

が石井記念友愛社にも言えるのではないかと感じました。

まずは、児嶋虬一郎氏と高鍋との出会いです。氏は岡山県で生まれ育ち、東京で大学時代を過ごし、大学卒業後の多くの年月は召集により従軍、1944年8月に岡山聯隊に入営し高鍋に駐屯、1年後に終戦となりました。これが茶臼原を訪ねるきっかけとなったのです。虬一郎氏は岡山孤児院の遺産を直に見て、関係者や近隣の人々と話すことによって、石井十次の声を聞き取ったのではないかと想像されます。高鍋は地域であって人ではありませんが、虬一郎氏と高鍋との出会いも偶然であり必然であったのでしょうか。

1945年10月の事業開始後、石井記念友愛社は児童養護事業・保育事業を中心に、地元地域の生活安定と子どもの成育環境の向上を目指して、地域住民や諸団体・機関とのネットワークを作りつつ、地域事業に取り組み、また、地域の歴史・文化の保存・継承(文集「開拓」の発行等)や海外支援事業(ベトナム難民援護事業等)も行いました。児嶋虬一郎氏退任(1991年1月)後の児嶋草次郎現理事長時代の友愛社も、石井十次と児嶋虬一郎氏の理念を受け継ぎながら、地域のニーズを汲み取りつつ事業を展開しています。草次郎現理事長は友愛社の到達目標を「友愛の地域づくり」(＝年齢や障がいの有無等を超えてみんなで支え合う地域社会作り)としています。社会福祉や地域事業に関する研究や関係者間の交流も、石井十次セミナー(1998年～)や『石井十次資料館研究紀要』(2000年～)で毎年活発に行われています。大原芸術研究所の活動の“「人間」に向き合い、未来へ貢献する”挑戦と同様の気概を有していると言えるでしょう。また、石井記念友愛社後援会が1997年に設立され、2007年に名称を「石井十次の会」として活動を続けています。

2025年、石井記念友愛社は80周年を迎えました。友愛社の事業をバネに、これからもみんなで支え合い、誰もが生きていて良かったと思える未来が開かれますよう期待しております。

引き継がれる大切な事

西都市支部副部長 石川 健

皆様、いかがお過ごしでしょうか。

私は茶臼原で生を受け、ひかり保育園、茶臼原小学校で育てられました。

現在 50 歳。お陰様で、この茶臼原の地で有機栽培の抹茶生産をさせてもらっています。

「三つ子の魂百まで」と言われますが、常に思い出されるのは石井十次先生のエピソードで有名な「縄の帯と紬の帯の交換」のお話です。

「石井十次の歌」でいつでも思い出される名シーンです。

さて、そのエピソードには登場しませんがお母さまの存在も忘れてはいけません。

私の記憶によると、縄の帯をつけて帰ってきた十次君を見てどうしたのか聞いただろうと想像ができます。

わが子の行いを聞いて「良いことをしたわね。それならまた作ってあげますね」という対応をされたと聞いて私は育ちました。

今の時代ならどうでしょう。「誰がいじめたとね?」「すぐ先生にいわなくちゃ」「あの帯、お母さんが一生懸命作ったとよ」「まったく」

というシーンが私にはイメージできます。

『全て外側に向けたエネルギーの発し方です。』

孤児との生活でも、お金がつき食べるものにも不憫をしたその瞬間、十次先生のとった行動は「神に祈り子供達と読書に深け込んだ」といういち場面を「石井十次のおとうさんありがとう」という映画で見せてもらいました。

するとタイミングよく御支援を受けたのです。

この行動、実は今世界のリーダー達がやっている方法だったのです。

「苦しみの意識は天にお任せします」

そして「何かに没頭する」

没頭している時、実は『悟り』の状態なのです。

『悟ると周りから富がやって来る』と言う事を気付き始めた人達から、『自分の内側とのやり取りこそ、世界平和につながる』ことに気付き始めています。

皆様もまずは自分の魂をねぎらってあげてください。

自分の魂が癒されると『愛』が生れます。

すると周りは自然と『寄り添いの愛』で満たされていきます。

この現象こそがまさに『奇跡』を起こします。

皆様の奇跡で気持ちの満たされた世界を一日一日過ごしていこうではありませんか。

これからもよろしく願います。

懐かしい昭和30年代の小学校での暮らし

映画「石井のおとうさんありがとう」を再度鑑賞して、小学校時代のことを懐かしく思い出しました。

昭和30年代、私たち兄弟姉妹は山奥の小さい村で育ちました。小学校1～2年のころ、教室では複々式（1年7名、2年2名、3年3名）学級の授業が行われました。ほかに小さな図書室があったことを覚えています。先生はひとりおられ、よくオルガンを弾いてくださいました。時々本校から校長先生が来られました。遊具は、ブランコのほかにシーソーや人気の回転ブランコが設置されていました。また運動場側の校舎入り口には、大きな鐘（チャイム）が吊るされていました。

子どもたちのほとんどはわら草履を上履きとして使っていました。数日に一度のペースで、祖父が兄と私のために編んでくれました。両足を少し伸ばし、縄を足にはさみ慣れた手つきで作っていきます。この様子をいつも見ていた私は自分でも作れるようになりました。

分校では、のびのびと生活し昼休みには「バスごっこ」「しし狩ごっこ」に明け暮れていたことが印象に残っています。「バスごっこ」は日めくりカレンダーを切符代わりにし、運転手、車掌、お客さんの役割を交代しながら運動場を一周するのです。「しし狩ごっこ」はイノシシ役、犬役、狩人役に分かれ、裏山に入り狩りの真似をするのです。父たちが酒を酌み交わしながら愉快地狩りの話をしている様を見聞きし、自分たちもやってみたいと思ったのでした。男の子も女の子もみんな裏山を駆け回り汗だくになっていました。昼休みが終わるころには、大きな鐘の音が聞こえてきました。（次号へつづく）

（むつび編集委員 黒木三鶴）

《 お し ら せ 》

★新会員ご紹介（敬称略）

【都城市】NPO 法人敬愛慈威

*ここまでの掲載者は編集等の都合により1月18日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭言は、元福岡県立大学の田代英美氏に玉稿をいただきました。「人と人との出会いは、偶然であり、そして必然である」という言葉が特に印象に残りました。

編集委員 黒木 三鶴